
涙色に染まる世界

薄雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙色に染まる世界

【Nコード】

N1447W

【作者名】

薄雅

【あらすじ】

あることをきっかけに人を信じることができなくなった天才的な歌声を持つ紫苑しおんこかげ小陰、元気で陽気な男の子飛来ひらいかなと彼鳥、ミステリアスだけど優しい男の子天台てんだいひかる輝。三人はどうやって信頼を繋ぐことができるのだろうか？

運命とは…

人は「ひとめぼれした」とか「この人だと思った」とよく言う。
どうしてこんなことってあるのだろうか。

「運命」がどうかこうとか私には、無縁だと思う。

現に16年生きて、そのようなモノにあったことがない。
だからこんなことは信じない。

昔から「ネガティブ女」と呼ばれている小陰紫苑16歳。

友達なし、好きな人なし…すべてにおもしろくないと思う人間だ。
好きな人はいないが好きな事はある。

歌を歌うこと、作詞で。

恋とかは信じないけど歌詞はすべて恋の歌。

みんなが話していることを歌詞に入れるから人間観察はかかさない。

「うわぁゝまた紫苑さん何かしてるよ」

「見てきなよ」

「えゝ嫌だよ」

こんなことは日常茶飯事。

静かな方が好きだから近づくなとは思ってからうれしいが。

そんな誰も近づかない中近づく五月蠅い奴らがこの中にいる。

「早くしろよ」。先生に捕まるって！」

「彼鳥が速すぎるんだってば！」

「待て！飛来、天台！」

先生に追っかけられているこの二人が五月蠅い飛来彼鳥と天台輝。
2人は幼馴染&親友らしい。

なぜ五月蠅いかというと…

「紫苑っていつも何が書いているよな。何書いてんだ？」

彼鳥が近づいてきて言った。

後ろから見られるって…。

「うん。なんか詩みたいだけど…」

いつもつるんでる輝が言った。

「なあなあこれ何だ？」

とまあ、1日1回以上これを聞けばウザ…五月蠅いとも思ってくるだろう。

この前なんて…

『いつも君のことをかんがえてしまう

君の 好きな食べ物 好きなこと

好きなモノ 好きな人…

いる？ いない？

いないと願う私は嫌な女

いつも君に目がいつて

他のものなんて見えないよ

見えるわけないよ 君に夢中で 君のすべてを知りたいから…』

「ちょ、ちよつとやめてよ！」

途中で止めに入った。恥ずかしすぎる。

「彼鳥おゝ何それゝチヨーウケルうゝ！」

「ああこれ、紫苑の書いてあるやつを読んだ」

やめてほしい。

「えゝ。アイツにこんなの書けるわけないじゃん。第一『れんあい』

したことあんの？」

「ないんじゃない？」

「あはははは」

なんてことがあつて恥をかいた。

こんなことがあつてから私はあの2人（特に飛来）のことはきらいになった。

運命とは…（後書き）

…時空のアウラをほったからしてこっちを初めてしまった。

だって書きたかったもん！！

まあ、作者の私も恋愛をしたことがないのだが…

恋愛初心者の私が書いてもいいものなのかわからなかったが書いてしまった

ほんの作者の好奇心で書いた物語です

付き合っただけならうれしいです

帰り道（前書き）

サボってしまつてすみませんでした。><
少しずつでも再開してこうかと思っています
では2話目です

帰り道

学校の帰りはいつも、坂を少し上がった場所にある丘に行く。
ここは田舎だから色々な所に丘がある。

その丘は夕日がきれいに見えるから好きだ。

そこで小陰はいつも歌を歌っている。

「いつも君のことを考えてしまう

君の 好きな食べ物 好きなこと

好きなもの 好きな人…

いる？ いない？

いないと願う私は嫌な女

いつも君に目がいつて

他のものなんて見えないよ 見えるわけないよ

君に夢中だから 君のすべてを知りたいよ

誰かといると 嫉妬するし

誰かと話してる 何を話してるの？（知りたくなるし）

気になるけど 話さないでなんて言えない

それくらい 君が好き

君のこと見てるだけ（それは嫌）

でも話せない（勇気がないから）

だから見てるだけ 君と話す勇気が出るまで…」

バキッ！

枝の折れる音がした。

「え！？」

音がした方に振り返った。

「あつ！やべっ！」

「ばか彼鳥！気付いちやっただじゃん！」

「…何してるの、あなたたち…」

のぞいていたのは彼鳥と輝だった。

草に隠れていたのか頭に葉っぱが付いている。

「悪い…のぞくつもりはなかったんだけど…な、輝」

バツの悪そうな顔で彼鳥は言った。

「いや…バリバリあったでしょ。だって、校門で見かけたとき『あ

っ、あそこに紫苑がいる』って言って走って行ったじゃん」

「あ…いや…その…それは！」

小陰はこのやり取りを聞いて考えてた。

（あ…れ？今『校門で見かけたとき』って言ったよね！？それじゃ

あ…）

「え！？まさか最初から聞いてたの！？」

自分でもびっくりするくらい大きな声だった。

生まれて初めて大声を出した。

その声には2人とも驚いたらしく体をビクツとさせながら

「お…おう」

「ごめん…」

と、言った。

まったく今日は最悪な一日だ。

1番嫌いになった人と2番に嫌いになった人に歌を聞かれるなんて

…

帰り道（後書き）

はい！

2 話目です！

更新を待っていてくれていた方…本当に申し訳ありませんでした（

――）

作者にあるまじき1カ月半の放置…

これからはもう少しずつ書いていきたいと思ひます（ - - ； ）

最後に感想、誤字等お待ちしています

感想…いただけたらうれしいです

バカだった…（前書き）

今回は早く投稿できました！

それでは3話目です

どうぞ！

バカだった…

「それにしても、きれいな声なんね。紫苑の声って。なあ、彼鳥」
「ああ、すっげーきれいだよな。こう…心に響く感じ」

小陰は赤くなつてうつむいてしまった。生まれて初めてこんなことを言われた。

しかも男子に…

「そ、そんなことない！歌は好きだけど、人前では歌えないし、第一初めて聞かれたのがあなたたちなんて…最悪…」

最後は失礼なんで小さい声で言った。

「え！？何！？最後『最悪』って言った！？うわゝマジ傷つくわぁ」
「…」

彼鳥は本当に傷ついた感じの声で言った。

「だ、だってみんなの前で朗読されたのよ！最初からうるさくてギヤーギヤー騒いで！拳句の果てに人が気づかないのをいいことに歌を聞いているし、すごーくうっとうしいの！！」

いい加減にしてもらえる…？」

「……え？」

「……は？」

二人ともポカーンとしている。特に彼鳥は口をも開けている。相当驚いている様子だ。

小陰は、はつとした。しまった…思っていたことが全て口から出てしまった…

「まあ、とにかく私はあなたたち2人が嫌いなもの。わかった？わかったらこれ以上私に付きまとわないで！」

小陰は言ってしまった後悔と気恥ずかしさで早口に告げて去ろうとした。

1秒でも早くここを立ち去りたい気持ちでいっぱいだった。
でも、その時

「待てよ…」

彼鳥はそれを許さないと云うかのごとく小陰を止めた。

「な、何…」

「お前今までそんな風に思いながら、全てため込んで黙ってたわけ？
バツカじゃねーの！」

「そうだよ。言いたいことはきちんと言わなきゃ。僕たちが紫苑に
付きまとっていた訳知らないの？まあ、知らないよね。僕たちがつ
きまとってた理由。それは…」

「紫苑をクラスから浮かせないためだよ」

2人は真剣な面持ちで言った。

「…え？今なんて言ったの？」

他にも言ってやりたかったのに、やっと言えた言葉はこれだけだった。

彼鳥はあきれた声で言った。

「だ・か・ら浮かせないためだよ、お前を、クラスから」

「彼鳥…文法おかしい…」

輝がツツこんだ。

「何で？いつも浮いてんじゃん。人の話についていけないし、ファ
ッションもダメダメ、拳句の果てにめがねにおさげだよ。浮くにき
まってるじゃん」

「いや…話飛んでるし…」

またもや輝がツツコミを入れてきた。

「こほん。まあ、その浮いている私をどうやって浮かせないように
するつもりだったの？」

「あっ…いや…その…」

彼鳥は言葉を濁らせた。言っただったら早くしてほしい。

「俺たちってまあ、こんなだし騒がしいから目立つじゃん？だから
紫苑の近くで騒げばみんな紫苑の存在は見えるわけだし忘れないと

思ってたんだよ」

言いながら髪を指した。

彼鳥と輝の髪は金髪だ。居るだけで十分目立つ。

そしてその後を輝が続けた。

「だから僕たち、騒ぐときはいつも紫苑の近くに行ってたんだよ」
なんとなくいつも絡んでくる理由が分かった。あんなにうつつと
く思えるほど絡んできた人は今までに居なかった。うつつとしいと
初めて思えた。それと同時になぜかうれしいと思った時もあった。
アノ時以来こんな経験がなかったからわからなかった。

「私って…馬鹿だ…」

こんなにも私のことを考えてくれていた人に嫌いと言った。

一回口に出した言葉は取り消せない…最低だ。

そう思った瞬間涙が溢れてきた。

バカだった…（後書き）

はい！4話目です。

いやゝ今回は早く投稿することができました！

この話を書いていてつい感情的になって出してしまった言葉により友達を傷つけてしまったりしてるんだろぅな、ってほんとと思ってしまいました

友達関係って大変だなんて思います

小陰の思ってた『アノ時』とは…2章目に入ってから書きたいと思っています

私的に彼鳥の方が好きです（＾　＾）

なんか友達に見せるとタイプが分かれるんですよ（　・　・　；）

僕系か俺系か…悩みどころです（笑）

それではまた誤字等の報告をしてもらえるとありがたいです
感想のほうもお待ちしております

どうしよう・・・(前書き)

更新遅れてすみません(ーー；)
では4話目です

どうしよう・・・

「お、おい・・・どうしたんだよ・・・」

おろおろしながら彼鳥が言った。

すると、輝が、

「あれ少し強めに言い過ぎたかな？ほら彼鳥。謝りなよ」

「おう！って俺が！？」

「だって、彼鳥が泣いたんじゃないか！」

なぜかケンカが始まってしまった。

それを見てるとなぜか笑いがこみ上げてきて

「あははははは」

声をあげて笑ってしまった。

「あのな～もとはと言えばお前の事だったんだぞ」

彼鳥が小陰を見てあきれた声で言った。

「まあまあいいじゃん。明るくなったんだから」

輝も笑いながら言う。

「なんか2人を見てると笑っちゃう・・・あははっはは」

「お前ってホントはこんなに明るいんだな」

「ホント。何でいつもこんなに暗いのかわからないくらい明るいよ

ね」

小陰はハツとした。

（私はこんなに明るく笑っていていいのだろうか。あんなことがあったのに・・・。私はこんなに自由に笑っていていいの？）

そう思った瞬間に気持ちが悪くなってしまった。

「あれ？どうかしたの？顔色悪いよ、大丈夫？」

顔色が悪くなってしまったらしい。

輝が声をかけた。

「あ、マジだ。大丈夫か？」

輝も心配し声をかけくれた。

せつかく明るかった雰囲気を壊してしまった。

「ごめん。大丈夫だから。ありがとう。すごく楽しくて久々に笑ったよ」

そう言って立ち上がり、

「それじゃあ、私帰るね。また明日」

手を振った。

「おう！また明日！」

「うん。また明日！」

2人とも笑って返してくれた。

「本当は2人は悪い人ではなかったんだ・・・にしても久々に笑ったな」

家に帰る道を歩きながら小陰はつぶやいた。

あのことがあってから人を信じられなくなってしまった。信じていても最後には裏切られる。だったら最初から信じなければいい。そう思って生きてきたから人の前では明るくできないし、笑えなかった。泣けないし、怒れなかった。

人に自分の弱いところを見られなくなかった、見せなくなかった。いつも無表情。それがいいと思っていた。

だから今日、彼鳥や輝と笑っていてすごく不思議だった。

「どうして、あんなに笑えたんだろう」

12歳のころに自分の殻の中にひきこもってしまった小陰にとって不思議なことだった。

だからだろうか。詞にしたらわかるだろうと思ってしまったんだろう。

いつのまにかノートに詞を書いていた。

「自分しか信じないと 信じることはできないと

思ってたのになぜだろう どうしてなのだろうか

人のことは信じられず 自分の中にこもってしまった私は

どうすればいいの どうしたらいいの

教えてよ！」

詞を書いて、心を整理していたらわかった。

「もしかして2人のことを信じ始めているの？」

誰に言うわけでもなく1人でつぶやいた。

この歌詞は人に助けを求めるような・・・そんな歌詞だった。
そんなわけではない。

誰も信じないと決めた私が、また誰かを信じ始めてるなんで・・・。

一番信じてほしかった人に裏切られたのに・・・。

話すまで五月蠅い人としか思っていた人なのに？ たった少し話して、
笑い合ったただけなのに？

どうして？

紫苑の中でずっと謎が渦巻いたままだった。

どうしよう・・・（後書き）

はい、4話目です！

更新のスピードかなり遅いです（――；）

何回も何回もデータがぶっ飛んで・・・（泣）

落ち込んでたら、はいっ1か月！・・・

私パソコン向いていないのかもしれませんが（号泣）

今度からは小陰の過去編！

小陰の過去は悲しいのです（泣）

下書きを読み直すと

「コレ・・・ひどくね？」

ってところかなりありました

それでは誤字があつたら教えていただけると嬉しいです
感想だつたら泣いて喜びます！！！！

不思議なキモチ（前書き）

更新遅れてすみません
では5話目ですゝ

不思議なキモチ

（翌日）

心の中に謎が残るままいつも通りに登校した。

晴れていて気持ちがいいのだが、心は少し荒れ気味だった。

そんな気分で教室に入ると、

「おっはよー紫苑」

「おはよー紫苑」

いきなり頭を悩ませている問題の二人が朝一で声をかけてきた。

「おは・・・よう」

一応返した。それ以上、悩みを増やしたくない。

紫苑はいそいそと席へ着いた。

「もしもーし。なんか冷たくないですか」紫苑さん

何か、間抜けて聞こえる。まあ、無視するけど。

「なにかあったの？」

輝がにこにこしながら聞いてきた。

「まあ、少し困ったことが・・・ね」

「何で、俺が言うと答えてくれないわけ？」

拗ねたような声で言う彼鳥。

「飛来君はちよつと・・・ね」

「うわぁーきつーい」

「まあまあ、彼鳥もそんなに落ち込まないで・・・

ところで俺たちに話して大丈夫な事？」

これは・・・話してもいいのか？

目の前に居る聞かれている2人なのだが・・・

「話せる・・・かな？」

天台くんになら」

「ここで話せないなら屋上に行こうか？」

静かにうなずいた。しかし、同時に別の疑問が浮かんだ。

「あ、でも飛来君はどうするの？」

「ああ、コイツなら大丈夫じゃない？」

ジャングルでも生きていけそうじゃん（笑）」

「え、俺って野蛮人かなんかなのか！？」

「ああ、そうかもしれない。生きていけるよ！たぶん・・・」

「そこで紫苑も賛成するなよ・・・わかったよ。はい。2人でいつてらっしゃい」

がつくりうなだれて見送ってくれた。

く屋上

夏が近づいてきたからか程よい風が心地よい。

不思議なキモチ（後書き）

たぶんこれから更新できない可能性もあるのでいいます
メリークリスマス！よいお年を！

来年もよろしく願いしますm（
—
—
）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1447w/>

涙色に染まる世界

2011年12月19日18時00分発行